



慶應義塾大学ビジネス・スクール

輪狩 兼益 (C)

学生、輪狩兼益は会計学の六河岸教授につぎのようにのべた。

5

「資産として計上する固定資産の金額をどのように決めるか、その一般原則はかなり明確になりました。しかしそれを個々の状況にあてはめて考えた場合には非常に多くの問題が
あって困ります。」

以下に掲げたのは、それらの問題の一部である。

10

1. A製造会社が自社の修繕工を使って既存の建屋につけてもう一棟、増築した場合を考えよう。

以下に掲げる事項の会計処理は、どのように行なったら適切であろうか。

- a. 設計費用 15
- b. 建設期間中に生じた除雪作業の費用
- c. 建築資材の代金の支払いを期日前に行なったために受けた現金割引
- d. 建築事務所および工具室の建設費用。これは工場建屋の増築完成後には、とり壊わす。
- e. 建設資金として借入れた借入金の支払利息 20
- f. 増築する新棟が占有する土地の部分にかかる建築期間中の固定資産税
- g. 建設期間中に生じた仕損じの費用
- h. 修繕部門の製造間接費；監督者給料、修繕部門の建物および設備の減価償却費、修繕部門の光熱費、動力費、食堂、医務室、人事部門などの費用の配賦額
- i. 建設期間中の保険料、および保険ではカバーできなかった事故および傷害などの損失 25

2. B会社は建物つきで、ある広大な土地を購入した。同社はその建物を取り壊し、同地にホテルおよびそれに付随する事務所を建設する予定である。土地に建っていたの

このケースはハーバード大学経営管理大学院がクラス討議の資料として収集した。このケースは経営管理の良好な事例または不良な事例を示そうとするのではない。慶應義塾大学ビジネス・スクールはハーバード大学の好意ある許可を得て、これを教育に使用するため邦訳した。

30

なおケース中の諸関係を歪曲しない範囲において、氏名および若干の取引形態はこれを変更してある。

(1981.5.N.S.(K.T.))